

編集後記

雑誌名	日本文学誌要
巻	7
ページ	24
発行年	1961-12-30
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019051

今年の夏から闘病生活をすごしてこられた近藤先生は、本号が発行される頃には、お元気な姿で退院されるという大変うれしい見通しが出来た。ひそかな話によると、以前よりも見違えるほどに若返りの様相をおびてこられたそうである。ここからお慶びを申し上げたい。

本号は先生の還暦記念特集として、回想とエッセイ、気鋭の記念論文を寄稿していただいた。エッセイは、文学者としての先生の人間像があざやかにえがき出され、知られざるさまざまな側面を発見することが出来て、深い感動にゆずられる。こんなところに特集のねらいがあったのだが、ここであらためて、それぞれ御忙しいときにもかかわらず寄せていただいた方々に対して、御礼申しあげたい。

もう一つのねらいは、小田切教授の紀行談である。まだわが国では本格的に知られていないA・A諸国の横顔を紹介していただいたのは収獲だった。世界の焦点となりながらもとくに文化的方面の関心はとぼしい。独自の

印象と観察を味読していただきたい。

本誌の歴史は、学問の進歩がとざされた時代において、国文学界に新しい学風を形成した。こんにちでは、すでに常識としてひろく知られている。けれども、そのたたかいたの実体については、殆んど知られてはいなかったのではないだろうか。戦後期に学んだものにとっては、とくにそうであった。しばしば、往年の活気にとぼしいではないか、などという声もきかれた。本号の最初のねらいというのも、近藤先生の還暦記念を機会に、いっそう新しい活気を国文学界にみなぎらせよう、ということにあった。

こういう点からみて、気鋭の諸論文には、積極的な姿勢を打出そうという意欲がみなぎっていることが感じられると思う。前途は明るいといえるのではないだろうか。が、また多難な試練も予想されるこのごろである。

この記念号が新しい活気の礎石をふみしめる一歩となればさいわいである。

願わくばわが学究諸兄姉よ集い来れ。

(小林記)

一九六一年十二月三〇日発行

定価 一八〇円

日本文学誌要 第七号

編集委員 法政大学国文学会

近藤 忠義 小田切秀雄

小原 元 正木 信一

阪下 圭八 小林 茂夫

吉田恵美子 鈴木 穆

印刷者 東京都中央区銀座東三ノ七

東銀座印刷出版株式会社

電話銀座東(541)三九四七

発行所 東京都千代田区富士見町

法政大学大学院内

法政大学国文学會

電話東京(301)二三五一番

振替東京六九四三番